

[D年] 聖霊降臨節第16主日(2020年9月13日)**【旧約聖書日課】エレミヤ書 28章1～17節**

1その同じ年、ユダの王ゼデキヤの治世の初め、第四年の五月に、主の神殿において、ギブオン出身の預言者、アズルの子ハナンヤが、祭司とすべての民の前でわたしに言った。

2「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしはバビロンの王の轡を打ち砕く。3二年のうちに、わたしはバビロンの王ネブカドネツァルがこの場所から奪って行った主の神殿の祭具をすべてこの場所に持ち帰らせる。4また、バビロンへ連行されたユダの王、ヨヤキムの子エコンヤおよびバビロンへ行ったユダの捕囚の民をすべて、わたしはこの場所へ連れ帰る、と主は言われる。なぜなら、わたしがバビロンの王の轡を打ち砕くからである。』」

5そこで、預言者エレミヤは主の神殿に立っていた祭司たちとすべての民の前で、預言者ハナンヤに言った。

6預言者エレミヤは言った。

「アーメン、どうか主がそのとおりにしてくださいるように。どうか主があなたの預言の言葉を実現し、主の神殿の祭具と捕囚の民すべてをバビロンからこの場所に戻してくださるように。7だが、わたしがあなたと民すべての耳に告げるこの言葉をよく聞け。8あなたやわたしに先立つ昔の預言者たちは、多くの国、強大な王国に対して、戦争や災害や疫病を預言した。9平和を預言する者は、その言葉が成就するとき初めて、まことに主が遣わされた預言者であることが分かる。』」

10すると預言者ハナンヤは、預言者エレミヤの首から轡をはずして打ち砕いた。11そして、ハナンヤは民すべての前であつた。

「主はこう言われる。わたしはこのように、二年のうちに、あらゆる国々の首にはめられているバビロンの王ネブカドネツァルの轡を打ち砕く。』」

そこで、預言者エレミヤは立ち去った。

12預言者ハナンヤが、預言者エレミヤの首から轡をはずして打ち砕いた後に、主の言葉がエレミヤに臨んだ。

13「行って、ハナンヤに言え。主はこう言われる。お前は木の轡を打ち砕いたが、その代わりに、鉄の轡を作った。14イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしは、これらの国すべての首に鉄の轡をはめて、バビロンの王ネブカドネツァルに仕えさせる。彼らはその奴隷となる。わたしは野の獣まで彼に与えた。』」

15更に、預言者エレミヤは、預言者ハナンヤに言った。

「ハナンヤよ、よく聞け。主はお前を遣わされていない。お前はこの民を安心させようとしているが、それは偽りだ。16それゆえ、主はこう言われる。『わたしはお前を地の面から追い払う』と。お前は今年のうちに死ぬ。主に逆らって語ったからだ。』」

17預言者ハナンヤは、その年の七月に死んだ。

【使徒書日課】ヨハネの手紙一 5章10～21節

10神の子を信じる人は、自分の内にこの証しがあり、神を信じない人は、神が御子についてなされた証しを信じていないため、神を偽り者にしてしまっています。11その証しとは、神が永遠の命をわたしたちに与えられたこと、そして、この命が御子の内にあるということです。

12御子と結ばれている人にはこの命があり、神の子と結ばれていない人にはこの命がありません。

13神の子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書き送るのは、永遠の命を得ていることを悟らせたいからです。14何事でも神の御心に適うことをわたしたちが願うなら、神は聞き入れてくださる。これが神に対するわたしたちの確信です。15わたしたちは、願い事は何でも聞き入れてくださるということが分かるなら、神に願ったことは既にかなえられていることも分かります。

16死に至らない罪を犯している兄弟を見たら、その人のために神に願いなさい。そうすれば、神はその人に命をお与えになります。これは、死に至らない罪を犯している人々の場合です。死に至る罪があります。これについては、神に願うようにとは言いません。17不義はすべて罪です。しかし、死に至らない罪もあります。

18わたしたちは知っています。すべて神から生まれた者は罪を犯しません。神からお生まれになった方が、その人を守ってくださり、悪い者は手を触れることができません。19わたしたちは知っています。わたしたちは神に属する者ですが、この世全体が悪い者の支配下にあるのです。20わたしたちは知っています。神の子が来て、真実な方を知る力を与えてくださいました。わたしたちは真実な方の内に、その御子イエス・キリストの内にいるのです。この方こそ、真実の神、永遠の命です。21子たちよ、偶像を避けなさい。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 8章37～47節

37あなたがたがアブラハムの子孫だということは、分かっていて。だが、あなたがたはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉を受け入れないからである。38わたしは父のもとで見たことを話している。ところが、あなたがたは父から聞いたことを行っていない。』

39彼らが答えて、「わたしたちの父はアブラハムです」と言うと、イエスは言われた。「アブラハムの子なら、アブラハムと同じ業をするはずだ。40ところが、今、あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに語っているこのわたしを、殺そうとしている。アブラハムはそんなことはしなかった。41あなたがたは、自分の父と同じ業をしている。』そこで彼らが、「わたしたちは姦淫によって生まれたものではありません。わたしたちにはただひとりの父がいます。それは神です」と言うと、42イエスは言われた。「神があなたがたの父であれば、あなたがたはわたしを愛するはずである。なぜなら、わたしは神のもとから来て、ここにいるからだ。わたしは自分勝手に来たのではなく、神がわたしをお遣わしになったのである。43わたしの言っていることが、なぜ分からないのか。それは、わたしの言葉を聞くことができないからだ。44あなたがたは、悪魔である父から出た者であつて、その父の欲望を満たしたいと思っている。悪魔は最初から人殺しであつて、真理をよりどころとしていない。彼の内には真理がないからだ。悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、その父だからである。45しかし、わたしが真理を語るから、あなたがたはわたしを信じない。46あなたがたのうち、いったいだれが、わたしに罪があると責めることができるのか。わたしは真理を語っているのに、なぜわたしを信じないのか。47神に属する者は神の言葉を聞く。あなたがたが聞かないのは神に属していないからである。』

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エレミヤ書 28章1～17節

1その同じ年、ユダの王ゼデキヤの治世の初め、四年の第五の月に、主の神殿において、ギブオン出身の預言者、アズルの子ハナンヤが祭司たちとすべての民の前で私に言った。

2「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。私はバビロンの王の軛を打ち砕く。3二年のうちに、バビロンの王ネブカドネツァルがこの場所から持ち去ってバビロンに運んだ主の神殿の祭具をすべて、私がこの場所に持ち帰らせる。4また、バビロンに行ったユダの王であるヨヤキムの子エコニヤ、およびユダの捕囚の民をすべて、私がこの場所に帰らせる——主の仰せ。私がバビロンの王の軛を打ち砕くからだ。」

5そこで、預言者エレミヤは主の神殿に立っていた祭司たちとすべての民の前で、預言者ハナンヤに言った。6預言者エレミヤは言った。「アーメン、どうか主がそのとおりになさるよう。あなたが預言した言葉を主が実現し、主の神殿の祭具とすべての捕囚の民をバビロンからこの場所に帰らせてくださるよう。7だが、私があなたとすべての民の耳に告げるこの言葉をよく聞け。8昔からあなたや私に先立つ預言者たちは、多くの国、強大な王国に対して、戦争や災害や疫病を預言した。9平和を預言する者は、その言葉が成就したときに、本当に主が遣わされた預言者であったと分かる。」

10すると預言者ハナンヤは、預言者エレミヤの首から軛の横木を外して、打ち砕いた。11そして、ハナンヤは民すべての前で言った。「主はこう言われる。私はこのように、二年のうちに、すべての国民の首からバビロンの王ネブカドネツァルの軛を外して打ち砕く。」そして、預言者エレミヤは立ち去った。

12預言者ハナンヤが、預言者エレミヤの首から軛の横木を外して打ち砕いた後に、主の言葉がエレミヤに臨んだ。13「行って、ハナンヤに言え。『主はこう言われる。あなたは木の横木を打ち砕いたが、その代わりに鉄の横木を作ることになる。14イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。私は、これらのすべての国民の首に鉄の軛をはめて、バビロンの王ネブカドネツァルに仕えさせる。そこで彼らは彼に仕える。私は野の獣まで彼に与えた。』」

15さらに、預言者エレミヤは、預言者ハナンヤに言った。「ハナンヤよ、よく聞け。主はあなたを遣わされていない。あなたは偽ってこの民を安心させようとした。16それゆえ、主はこう言われる。私はあなたを地の面から追い払う。あなたは今年のうちに死ぬ。主に逆らって語ったからだ。」

17預言者ハナンヤは、その年の第七の月に死んだ。

ヨハネの手紙一 5章10～21節

10神の子を信じる人は、自分の内にこの証しを持っています。神を信じない人は、神を偽り者になっています。神が御子についてされた証しを信じないからです。11この証しとは、神が私たちに永遠の命を与えてくださったということです。そして、この命は御子の内にあります。12御子を持つ人は命を持っており、神の子を持たない人は命を持っていません。

13神の子の名を信じるあなたがたに、これらのことを書いたのは、あなたがたが永遠の命を持っていることを知ってほしいからです。14何事でも神の御心に適うことを願うなら、神は聞いてくださる。これこそ私たちが神に抱いている確信です。15私たちは、願い事を何でも聞いてくださると知れば、神に願ったことは、すでにかなえられたと知るのです。

16もし誰かが、死に至らない罪を犯しているきょうだいを見たら、神に願いなさい。そうすれば、神は死に至らない罪を犯した人に命をお与えになります〔別訳→その人は死に至らない罪を犯した人に命をお与えることになります〕。しかし、死に至る罪もあります。これについては、願ひ求めないとは言いません。17不正はすべて罪ですが、死に至らない罪があります。

18神から生まれた人は誰も罪を犯さないことを、私たちは知っています。神から生まれた人は自分を守り〔異本→神から生まれた方がその人を守ってください〕、悪い者がその人に触れることはありません。19私たちは神から出た者であり、全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。20しかし、神の子が来て、真実な方を知る力を私たちに与えてくださったことを知っています。私たちは、真実な方の内に、その御子イエス・キリストの内にはいます。この方こそ、真実の神であり、永遠の命です。21子たちよ、偶像から身を守りなさい。

ヨハネによる福音書 8章37～47節

37あなたがたがアブラハムの子孫だということは、分かっている。だが、あなたがたは私を殺そうとしている。私の言葉を受け入れないからである。38私は父のもとで見たことを話しているが、あなたがたは父から聞いたことを行っている。」

39彼らが答えて、「私たちの父はアブラハムです」と言うと、イエスは言われた。「アブラハムの子なら、アブラハムと同じ業をしているはずだ。40ところが、今、あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに語っているこの私を殺そうとしている。アブラハムはそんなことはしなかった。41あなたがたは、自分の父と同じ業をしている。」そこで彼らが、「私たちは淫らな行いによって生まれたわけではありません。私たちにただひとりの父がいます。それは神です」と言うと、42イエスは言われた。「神があなたがたの父であれば、あなたがたは私を愛するはずである。なぜなら、私は神のもとから来て、ここにいるからだ。私は勝手に来たのではなく、神が私をお遣わしになったのである。43私の言っていることが、なぜ分からないのか。それは、私の言葉を聞くことができないからだ。44あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、その父の欲望を満たしたいと思っている。悪魔は初めから人殺しであって、真理に立っていない。彼の内には真理がないからだ。悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、偽りの父だからである。45しかし、私が真理を語っているのに、あなたがたは私を信じない。46あなたがたのうち、一体誰が、私に罪があると責めることができるのか。私が真理を語っているのに、なぜ私を信じないのか。47神から出た者は神の言葉を聞く。あなたがたが聞かないのは、神から出た者でないからである。」

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・9月13日「聖霊降臨節第16主日」の日課主題「神に属する者」は、使徒書日課(ヨハネの手紙一 5章)および福音書日課(ヨハネ8章)に訳語として出てくる。新共同訳で「神に属する…」と訳されている聖句は多くない。しかし、原典ギリシア語「エク・トゥ・テウー」は、「神から…」と訳される語として、特にヨハネ文書とパウロ書簡で繰り返し用いられている。日本語で「属する」と訳されているが、原意は「～から」と出自を示す表現で、転じて帰属を意味する表現として意識されている。そこで、この日の日課箇所を貫く主題は、「神からの(遣わされた)者」という意味で理解することができる。旧約日課も、この理解に基づいて設定されている。

旧約日課(エレミヤ 28章より)

・「エレミヤ書」は、「イザヤ書」「エゼキエル書」と共に三大預言書と呼ばれる大部の預言書で、ユダヤ教正典では「後の預言者」の第三巻に置かれている。本預言書は、預言者エレミヤの預言活動と預言集の雑然とした集成となっており、他の預言書に比べて編集構成意図の解釈が困難であったり、異なる構成の写本版が存在したりと、異質な預言書になっている。にもかかわらず正典の重要な位置を占めている。これらのことは、正典編纂を担った集団(預言者の伝統を継承する集団?)にとって「預言者エレミヤ」が不可欠の存在であったこと、一方で、「預言者エレミヤ」の預言を継承しようとする複数の集団が存在した可能性があることを、示唆するものである。

・預言者エレミヤは、紀元前622年ごろに始まった南王国ヨシヤ王の国政改革を祭司の立場で支えた人物であったと推定されている。この改革は、前609年にヨシヤ王が戦死することで頓挫し、改革を支えたエレミヤらは、エジプトの傀儡政権となった次王らのもと、非主流に追いやられ、迫害の対象となった。「エレミヤ書」に物語られるエレミヤの預言活動の逸話の多くは、この迫害時代を伝えるものであり、日課箇所も、体制側に立つ主流派預言者ハナンヤとの対立が描かれている。日課箇所冒頭の「その同じ年」は、27:1にも示された年のことで、エレミヤが改革を支えたヨシヤ王の子である「ゼデキヤの治世」のこととされているが、ゼデキヤ王は、ヨシヤ王の後すでに4代目であり、南王国最後の9年間を治めた王である。

・この場面でエレミヤは、「軛」を首にはめて登場する。これは、前章(27章)で、「軛」を自らの首にはめるといふ「象徴行為」を伴って預言を告げたことを踏まえたものである。ユダ王国と民が「バビロンの王の軛を負う」(27:11)ことになり、それが何十年も続くことをエレミヤは預言するが、体制主流派の預言者ハナンヤは、神がその「バビロンの王の軛を打ち砕く」のは「二年のうち」であると預言し、エレミヤの首の軛を打ち砕いた。

一見すると、ハナンヤの預言のほうが希望に満ちており、エレミヤの悲観的な預言は人々に受け入れられないが、現実には、その後、王国の滅亡とバビロン捕囚によって数十年間、「バビロン王の軛」のもとに置かれることになった。

・エレミヤは、バビロン捕囚の期間を「七十年」(29:10)と預言している。前587年のエルサレム陥落・南王国滅亡から、前538年のペルシャによる捕囚解放・ユダヤ帰還開始までの期間は約50年であるが、おそらく、ヨシヤ王戦死の前609年から数えての約70年を「バビロンの軛」と見ているのだろう。これは、モーセ物語で一世代の交代を待たされた「四十年」と比べても長く、二世代を経た後のことという示唆を含むのだろう。・エレミヤのハナンヤに対する批判は、預言の正当性をどのように検証するかという問題として告げられている。事実として、エレミヤの預言こそが歴史事実に耐えうるものであったことから、預言者集団によって後世に継承されたのであろうが、他の預言書を含めてすべての預言が常に検証可能な将来を予示したものであるとして受けとめられたわけではない。ことに、預言書をまたいで現れる黙示的表現を用いた「終末預言」は、検証不能な将来を視野に入れた預言として語られ、また、そのようなものとして受けとめられていった。

使徒書日課(Ⅰヨハネ5章より)

・「ヨハネの手紙一」は、「ヨハネ福音書」を生み出したのと同じ教会共同体の中から生み出された牧会的書簡で、教会共同体で生じていた神学理解の相違による衝突や分裂に対してどのように応じるべきかを、原点回帰という姿勢で教えている。日課箇所は、本書簡の末尾にあたる。

・日課箇所を含めて、本書簡4~5章には、繰り返し「神に属する／神から[出る／生まれる]」という表現(原語ではいずれも「エク・トゥ・テウー」)が用いられている。この表現は、御子イエスにこそふさわしいものに思われるが、ヨハネはキリストと結ばれた者がすでに「神の子」として御子と同じ性質を与えられているとの理解から、信仰者に対してこの表現を多用する。そこで、18節後半は、聖書協会共同訳で採用されているような写本(「神から生まれた人は自分を守り、悪い者がその人に触れることはありません」)も有力なものとして残されている。

・18~20節には「わたしたちは知っています」が三度繰り返されている。ここに掲げられているものは、おそらく、ヨハネの教会共同体の信仰宣言のようなものとして共有されていたのであろう。同様に、21節の勧めも、ヨハネの教会共同体で、おそらく、世の生活へ送り出す際の派遣の言葉の常套句として用いられていたのだろうと推測されている。なお、「偶像を避ける」は、いわゆる異教礼拝への警戒ではなく、自己神化の結果として生じる共同体の分断に対する警戒である。

福音書日課(ヨハネ 8 章より)

・日課箇所は、前週日課箇所と同様、主イエスが「仮庵祭」に際してエルサレム神殿の境内で人々と議論した一連の逸話を伝えるものである。聖書日課表では、31~36 節も参照箇所として挙げ、合わせて読むように指示している。

・ここで、主イエスと対峙している人々は、直前で「御自分を信じたユダヤ人たち」(31 節)として登場していた人々である。ヨハネ福音書は、繰り返し、信じて従おうとしてきた人々に対して、主イエスがあえて厳しい問いかけをし、まるでふるいにかけるように離れさせてしまう様子が描かれる。実際にそのようなことが起こっていたということでもあるだろうが、ヨハネ福音書の意図は、このことを繰り返し描くことによって、読者である教会共同体に属する仲間たちに、自分自身の信仰を吟味し、繰り返し見直すことを勧めることにあったのだろう。そこで、ここでは、逆説的に、主イエスのお語りになる「真理」の御言葉にこそ耳を傾けるべきことが告げられている。

来週の誕生日 (9 月 13 日~19 日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-223 番「造られたものは」(= I-75 番「ものみなこぞりて」)は、13 世紀イタリアの修道士アッシジのフランチェスコの宗教詩「太陽の讚歌」による讚美歌。曲は、17 世紀ドイツで出版された讚美歌集所収の原曲をヴォーン・ウィリアムスが修正し、広く英語圏でも広まったもの。
- ・21-194 番「神さまはそのひとり子を」は、1966 年版『こどもさんびか』編纂に際して、編纂委員の一人で日本を代表する讚美歌学者の由木康がヨハネ 3:16 の聖句に基づき作詞し、阿佐ヶ谷教会員で作曲家の小山彰三に作曲を委嘱して作られた。
- ・21-394 番「信仰うけつぎ」は、19 世紀英国人で国教徒からカトリックに転じたフェイバーの作詞。英国教会改革の時代に弾圧を受けたカトリックの立場から歌った歌詞で、かつては英米圏で広く採用されていた(現在は各派歌集から削除されている)。曲は、19 世紀ドイツ系英国カトリック信徒の教会音楽家ヘミーが、当時のカトリック復興運動の中で作曲。

21-223「造られたものは」

Laudato sl', mi Signor

「太陽の賛歌」(アッシジの聖フランシスコ)

いと高い、全能の、善い主よ、
 賛美と栄光と誉れと、すべての祝福は、あなたのものです。
 いと高いお方よ、
 このすべては、あなただけのものです。
 だれも、あなたの御名を呼ぶにふさわしくありません。

私の主よ、あなたは称えられますように

すべての、あなたの造られたものと共に太陽は昼であり、
 あなたは太陽で私たちを照らされます。
 太陽は美しく、偉大な光彩を放って輝き、
 いと高いお方よ、
 あなたの似姿を宿しています。

私の主よ、あなたは称えられますように
 姉妹である月と星のために
 あなたは、月と星を天に明るく、貴く、美しく創られました。

私の主よ、あなたは称えられますように
 兄弟である風のために。
 また、空気と雲と晴天と、あらゆる天候のために
 あなたは、これらによって、
 御自分の造られたものを扶け養われます。

私の主よ、あなたは称えられますように
 姉妹である水のために。
 水は、有益で謙遜、貴く、純潔です。

私の主よ、あなたは称えられますように
 兄弟である火のために。
 あなたは、火で夜を照らされます。
 火は美しく、快活で、たくましく、力があります。

私の主よ、あなたは称えられますように
 私たちの姉妹である母なる大地のために。
 大地は、私たちを養い、治め、
 さまざまな実と色とりどりの草花を生み出します。

私の主よ、あなたは称えられますように
 あなたへの愛のゆえに救済
 病いと苦難を堪え忍ぶ人々のために。
 平和な心で堪え忍ぶ人々は、幸いです。
 その人たちは、いと高いお方よ、あなたから栄冠を受けるからです。

私の主よ、あなたは称えられますように
 私たちの姉妹である肉体の死のために。
 生きている者はだれも、死から逃れることができませぬ。
 大罪のうちに死ぬ者は、不幸です。
 あなたの、いと聖なる御旨のうちにいる人々は、幸いです。
 第二の死が、その人々をそこなうことは、ないからです。

私の主をほめ、称えなさい。
 主に感謝し、深くへりくだって、主に仕えなさい。
 (訳：右井健吾)

21-394「信仰うけつぎ」

Faith of Our Fathers!

1. Faith of our fathers, living still / in spite of dungeon, fire, and sword. / Oh, how our hearts beat high with joy / whene'er we hear that glorious word.

Refrain: Faith of our fathers, holy faith, / we will be true to thee till death.

2. The martyrs, chained in prisons dark, / were still in heart and conscience free; / and blest would be their children's fate / if they, like them, should die for thee. [Refrain]

3. Faith of our fathers! We will love / both friend and foe in all our strife; / proclaim thee too, as love knows how, / by saving word and faithful life. [Refrain]

(Evangelical Lutheran Worship #812)